

漢語音韻学の難しさ - 『音韻学入門』前書き -

中村雅之

いかなる研究分野にも特有の用語というものはあるであろうし、その用語を理解しなければ研究が進まないということも決して珍しいことではないだろう。しかし漢語音韻学ほど初学者に対して多岐にわたる用語の理解を強いる分野も（とりわけ文系では）少ないかも知れない。「群母が一二等に現れないという事実と、匣母を破裂音で発音する方言があるという事実から、匣母の一部（ないし全部）が上古音で [g-] であったと推測することが可能である。」という文章を見て内容が理解できるのは、漢語音韻学について一定の訓練を積んだ者に限られる。漢語といえども音韻史を研究対象にするからには、一般的な言語学や音声学の用語の理解が前提になることは言うまでもない。上文の「破裂音」は音声学の用語である。しかしそれ以外に、伝統的な韻書や韻図に関わる概念を理解することなしには漢語音韻学を“なでる”ことさえ不可能なのである。

このような近づき難さからか、最近では音韻学に興味を持つ学生はほとんどいなくなってしまうようである。あるいは少し興味をもったとしても、簡単には全貌が見通せるようにならないため、あきらめるのかも知れない。昔、ある人が「音韻学には入門者と専門家しかいない」と言うのを聞いたことがあるが、全くその通りだと思う。あまりにも覚えるべき項目が多すぎるため、入門の段階を抜けるとほとんど専門家になってしまうのだ。というよりも、ある程度の情熱を持っていないと、途中で挫折してしまうということかも知れない。

漢語音韻学の要は中古音（隋唐時代の音韻体系）であり、その最良の概説は今なお、平山久雄「中古漢語の音韻」（『中国文化叢書 1 言語』所収、大修館 1967）であるが、何の予備知識もなくこれを読んでも、ほとんどの場合消化不良に陥る。まずは藤堂明保『中国語音韻論』（光生館 1980）によって輪郭をつかんでおくのがよいかも知れない。いずれにせよ独学には相当の忍耐を必要とする。

このたび『KOTONOHA』編集部の求めに応じ、『音韻学入門～中古音篇～』を単刊としてホームページ上に PDF ファイルで公開することにした。以下に、この間の事情を簡単に記すことにしたい。

この小冊は、筆者が 1989 年から 2002 年まで富山大学で担当していた音韻学演習の

テキストとして作成したもので、今回公開するのは1998年のバージョンである。最終バージョンは2001年作成のものであるが、その後の3度の転居とパソコンの代替わりにより、すでにそのデータは失われており、CD-Rに保存されていた1998年版が唯一のデジタルデータとして手元にあったため、今回はその1998年版を公開することにした。

テキストは用語の説明とその確認のための練習問題から構成されている。目標は音韻学の用語を理解し、基本資料である『広韻』と『韻鏡』を自在に利用できることである。当時の受講生は中国語学・文学を専攻する2・3年生で、全員が『広韻』と『韻鏡』を購入し、毎回ひたすら練習問題をこなした。あたかも小学生の算数の時間のように、学生が解答を黒板に書き、それを添削するわけである。単調と言えば単調な作業であるが、実際には学生は結構楽しんでやっていたように思う。徐々に規則性が分かってくると、パズルのような面白さがあるからだろう。

初期の授業では、中古音の推定音価についてはほとんど触れなかった。いかに有力な説といっても確定的なものではないし、記号があまりにも煩瑣だと学生の興味がひいていくことが目に見えていたからである。しかし、音価の説明なしには具体的なイメージが湧きにくく、肝心なところでストンと腑に落ちる感覚がない。そこで3年目ぐらいから、多少複雑でも音価の問題にも触れることにした。ところが一旦音価を記すとなると、今度は重紐の問題や『広韻』と『韻鏡』の体系のズレの問題という、入門レベルを超える内容にも幾分かは触れざるを得なくなった。この部分には私の個人的な見解も混じっており、音韻学の専門家が見れば、必ずしも定説になっていない事柄をあたかも既知の事実のように記していることに違和感を覚えるかも知れないが、基本概念を理解するための一種の便法と思って頂ければ幸いである。

今回の公開にあたっては、明らかな誤字を正した以外、1998年版のテキストをそのまま提示した。授業のテキストという性格上、練習問題に解答は付いていない。また文体は必ずしも統一されておらず、所々にくだけた会話体で記された箇所もあるが、これも特に改めてはいない。

このテキストだけで音韻学の全てが分かる訳ではないが、『広韻』と『韻鏡』という2つの基本資料に関する最小限の事項は説明されている。この小冊が音韻学の入門段階での悩みの解消に多少なりとも役立てば幸甚である。